

「特別活動の指導法」における校務演習の導入と 実践的指導力に対する学生の自己評価

森田健宏

MORITA Takehiro

新中学校学習指導要領が平成24年度より完全実施されることとなり、その中で子ども達には、確かな学力、豊かな心、健やかな体の調和を重視する「生きる力」を育むことが改めて示されるとともに、特に子ども達の心と人間関係を育成するための実践的指導力が求められている。この内容を具体的かつわかりやすく反映させることができる科目の1つに「特別活動」がある。現代の教職課程の教育については、平成22年度より「教育実践演習」が導入されるなど、具体的な場面想定による対応力や問題解決能力の育成が求められることとなっており、学習指導要領の解説書でも具体的実践例が数多く示されるようになった。この実践的指導力の育成については、著者がこれまで取り組んできた教職科目「特別活動の指導法」においても、校務シミュレーション学習を通して、教育実習以外の機会でも教育現場をイメージしながら学ぶことを意識させることにより取り組んできた。そこで、学生がこの科目を通じて何が身についたのか自己評価させることにより、本科日の意義と課題、および今日の教員養成の資質向上のあり方について検討した。

キーワード：新学習指導要領、特別活動の指導法、実践的指導力、教職課程、自己評価

1. はじめに

平成17年の文部科学大臣諮問により、現代の教員の資質向上などを含めたわが国の教育課程の基準全体の見直しが進められ、教育基本法、学校教育法の改正に伴い、学習指導要領も全校種共に改訂されるようになった。これは、今日の学校教育における様々な現実的課題に対し、積極的に改善を図ろうとしたものであり、例えば、「確かな学力」の定着を目指して基礎的・基本的な知識・技能を重視した学習内容の充実が取り入れられている。これは、今まで取り組んできた「ゆとり教育」の考え方を見直すものと評価されることも多いが、一方で、いわゆる知識偏重の詰め込み型教育への逆戻りであると批判される言及も見られる。事実、学生の中にも「私たちはゆとり教育の失敗作」と自虐的かつ制度を嘲笑する発言をする者も少なからずおり、

教員養成に携わる者としても非常に思い悩む問題である。しかしながら、これは制度の急激な変化に対する現場の認識の違いが生じていると考えることもでき、肯定的な面としては、自主的、創造的な取り組みが学校の中で容認される傾向になったことが挙げられ、また否定的な面としては、ゆとりとされる時間の取り扱い、解釈が大きく様々に分かれることになったことが代表的な見解として挙げられるであろう。また、PISA調査における国際間比較の結果が、学力低下や国際競争力への懸念として表れ、学習指導要領の改訂への直接原因になったと述べられているものもあるが、一種の横断的測定によるものに過ぎないと見ることもできる。そのため、「ゆとり教育」を通じて何が育ったのかをステレオタイプの批判を避けて検証する取り組みがあまりにおろそかになっているという現実も指摘できよう。この「ゆとり教育」の是非論はともかくとして、その制度に基づき育った世代をどう捉え、今後、

どのような活躍に期待するかを、制度設計時の考えに任せるだけでなく、改めて能力の肯定的側面を見て検討すべきであると考え。このような様々な意味での教育格差を是正するものとして、新学習指導要領では内容の充実化とともに、解説書において具体的な記述が数多く見られる。このうち、中学校の新学習指導要領は、一部科目の先行的な移行を実施しながら平成24年度より完全実施されることとなっているが、その内容を見ると、子ども達には、確かな学力、豊かな心、健やかな体の調和を重視する「生きる力」を育むことが改めて示されるとともに、特に子ども達の「心」と「人間関係」を育成するための実践的指導力が今日の教員に求められているという点も注目できる。これは、当然、現代の子ども達が良好な人間関係を築く力やコミュニケーション能力が低下していることの反映であり、今後、適切な範囲の競争や協同による学びを通じて社会に参加する基本的な能力を養おうとするものであると思われるが、これを学校教育の中で重点的に取り組まなければならないという趣旨が示されていることについて我々は留意しなければならない。すなわち、基本的なコミュニケーション能力や、協調性、愛他心などの道徳性については、本来、幼少期までの家庭教育をはじめ、ある種人間社会の自然な営みの中で当然のものとして育まれるべきものと考えられるが、今日の現実的な子ども達の日常生活行動を考えると、これらをスキルとして捉え、あるいはリテラシーと同様なものとして教え、身につけさせるべきものとしなければならないという考えに基づくものである。また、そのための教材として、例えば、道徳教育において「心のノート」が国により配布されていることや、NHK教育番組でも、幼児～小学校低学年向けの番組として「わたしのきもち」が放映され、「謝るスキル」、「仲間を求めるスキル」などを教えようとするものが現れたことから方策として伺える（「わたしのきもち」は平成22年3月に放送終了）。これら内容の是非は議論の余地があるものの、このような形で教えなければ身につかないという考え方が現れた現実を我々はきちんと受けとめなければならない。

そこで、学校教育の中で、このような人間関係力やコミュニケーション能力を具体的に育むことができる機会の1つとして「特別活動」がある。もちろん、教科教育でも協同的な学習活動を通じて協同性などは育まれるのであるが、児童・生徒がこれら目的を主たるものとして取り組みやすいという点では、当然重視さ

れる機会であると思われる。今回の新中学校学習指導要領のうち、「特別活動」については、「改善の基本方針」において、「望ましい集団活動や体験的な活動を通して」自主的、実践的な態度や人間関係を築くという基本的な考え方は保持されながら、活動のねらいや意義、教育目標を「明確にする」ことが示されている。これは、教育現場における学校行事等が、前改訂による年間授業時間の減少に伴い特別活動の時間が削減または簡略化されたり、特別活動の教育的意義を考えることが少なく形式的に消化されたりすることなどに対し、本来の意味を確認する意味を持つと思われる。また、「総則」に加え、改めて「人間関係を構築する能力や自信を持って主体的に参画する能力を育成する」という考え方が示されている。これらの能力を児童・生徒に育成するという考え方を教師が有するためには、当然ながら、日頃から教師自身が実際に良好な人間関係を築く能力を持ち、職員間の協同性、協調性を意識した活動ができなければ、とうてい指導にあたることなどできないであろう。すなわち、これは学習指導要領の改訂による現職教員への留意事項では留まらず、現代の教員養成課程に対しても強く求められている育成事項であると考えることができる。さらに、平成22年3月に発行された「生徒指導提要」でも第2章第4節に「特別活動の目標と生徒指導」が設けられ、例えば「それぞれが個性や自己の能力を生かし、互いの人格を尊重し合って生きることの大切さを学ぶ」ことなどが示されており、自己の能力を生かして自己実現を図っていくことの大切さが明記されている。このような経験が教職志望学生に活かされるならば、間違っても教職員間のいじめ問題などは生じないであろう。

そこで著者は、これまで教職科目「特別活動の指導法」において、主に校務シミュレーション学習法を通して、教育実習以外の機会でも教育現場をイメージしながら協同性やリーダーシップ性を意識させることに取り組んできた。特に、模擬職員会議や学校行事等の準備シミュレーションによるグループ学習を通じ、教員に必要な協調性や協同性を再認識させることを目的として実践してきている。しかしながら、その効果を明らかにするためには、学習者側にこの科目をどう受けとめ、具体的に何が身についたのか自己評価させることが必要と考える。そこで、学生の自己評価アンケートを通じ、本科目の意義と課題、及び今日の教員養成の資質向上のあり方について検討した。

2. 方法

調査期間：平成22年8月24日～27日

材料：調査用紙1部（※項目については表1参照）

教育実践の対象：私立S大学の中学校・高等学校教員免許状対象の教職課程受講の2回生（校種および免許科目は学部により異なり、「英語」「国語」「社会（公民）」「家庭」「栄養教諭」のいずれかに該当する。）

担当科目および実施形態：「特別活動の指導法」（講義2単位）として開講。前期集中講義4日間で実施している。

教育内容およびシラバス等：

・第1日目：「特別活動」の学習指導要領に基づく解説と教員の教育活動および業務の実際

- 第1講：教師の仕事の1日
- 第2講：学習指導要領における「特別活動」
- 第3講：「特別活動」に示される内容の実際
- 第4講：「特別活動」の指導案について

・第2日目：「特別活動」の学習指導要領に示される内容の理解と体験学習に基づく配慮事項の検討

- 第5講：グループ学習による模擬「職員会議」
- 第6講：「体育祭」の指導案検討と作成
- 第7講：「体育祭」の運用に関する体験学習（1）
- 第8講：「体育祭」の運用に関する体験学習（2）および指導案の振り返り

・第3日目：「特別活動」の実践的運用シミュレーションを教員の視点から考える

- 第9講：「修学旅行」の計画（1）校務の視点
- 第10講：「修学旅行」の計画（2）学習指導要領
- 第11講：「修学旅行」の計画（3）事前学習
- 第12講：「修学旅行」の計画（4）実施計画起案書

・第4日目：「特別活動」の実践的運用シミュレーションを教員の視点から考える

- 第13講：「修学旅行」の計画（5）実地シミュレーション
- 第14講：「修学旅行」の計画（6）しおり及び保護者向け連絡文書の作成
- 第15講：「修学旅行」の計画（7）プレゼンテーションと総括

なお、上記の教育内容、ねらいと詳細については、森田（2009）で述べているが、教材企画・開発にあたっては、現職教員の支援、助言を得て、実際の校務運用に即した内容になっている。

手続き：本調査は、最終授業時に評価に影響しない条件を提示して、無記名により実施している。調査用紙を受講生に配布し、次の通り、教示文を提示している。「次の各項目は、みなさんが将来、教師になったときに必要とされると考えられる内容で、また、この授業で培えることを想定した内容です。全ての授業が終わった今、下記の内容が自分にどの程度備わっていると考えるか、自己評価してください。さらに、今回の授業を通して「身についた」「成長した」と思えた項目には、項目番号に◎を付けてください。」なお、回答欄は6段階評定法（6.とてもそう思う～1.全くそう思わない）で設定している。調査内容のカテゴリーは、中学校学習指導要領「特別活動」の「目標」に示される文言に基づき、＜望ましい集団行動 1-集団の統率力、2-集団への適応力＞、＜自主的・実践的態度＞、＜人間関係を育む資質・意識＞、＜生き方・在り方＞の4つで構成している。

3. 結果と考察

本調査の基本統計量は表1に示す通りである。平均評定値の範囲は3.93～5.51と高い傾向にあり、全体的には受講生がこの講義を通して、特別活動の目標に示している事項について習得すべき学習内容あるいは意識すべき課題を認識できていたものと思われる。

カテゴリー別に見ると、＜人間関係を育む資質・意識＞、＜望ましい集団行動 2-集団への適応力＞の2つのカテゴリーがいずれも高い値となっている。これら2つのカテゴリーに共通する内容を推測すると、「人間関係」「協同性」を意識したものとなっている。教師の指導力に関しては、社会心理学の分野で知られるPM理論（三隅，1966）が教育分野でも援用されることが多い。すなわち、リーダーシップをP（Performance）「目標達成能力」とM（Maintenance）「集団維持能力」の2つの能力要素で構成されるとし、目標設定や計画立案、メンバーへの指示などにより目標を達成する能力（P）と、メンバー間の人間関係を良好に保ち、集団のまとまりを維持する能力（M）の2つの能力の大小によって、4つのリーダーシップタイプ（PM型、Pm型、pM型、pm型）に分類され、PとMが共に高い状態（PM型）のリーダーシップが望ましい、とした理論である。このリーダーシップ行動論は、その後、様々な心理学者によって明らかにされてきているが、いずれも課題達

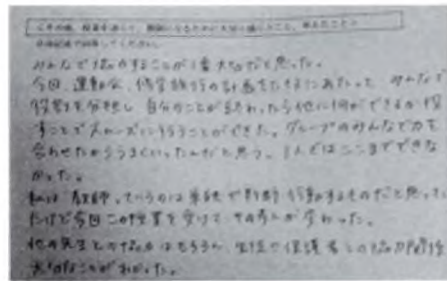
表1 本調査の基本統計量（評定平均値および各段階の評定者数）

	平均	1	2	3	4	5	6
<望ましい集団行動>		全平均=56.02 (/ 72)					
<望ましい集団行動-1 集団の統率力>		平均=26.02 (/ 36)					
1. みんなに必要な指示をすることができる。	4.40	0	1	9	15	8	10
2. みんなにわかりやすく説明ができる。	4.19	0	2	8	16	14	3
3. 仲間をひっぱっていくことができる。	3.93	0	5	12	14	5	7
4. みんなの意見をまとめることができる。	4.16	0	4	7	15	12	5
5. 仲間一人ひとりの意見をきちんと聞くことができる。	4.88	0	0	4	10	16	13
6. 仲間それぞれの想いや考えを察することができる。	4.47	0	2	7	10	17	7
<望ましい集団行動-2 集団への適応力>		平均=30.00 (/ 36)					
7. みんなと協調して行動することができる。	5.12	0	0	0	12	14	17
8. 自分と異なる意見を尊重することができる。	4.74	0	1	2	14	16	10
9. グループの協力関係に参加することができる。	5.21	0	0	1	5	21	16
10. 他人の発言に対し、前向きな意見を加えていくことができる。	4.53	0	2	4	14	15	8
11. 仲間の成功、達成を素直に喜ぶことができる。	5.47	0	0	1	3	14	25
12. 仲間の失敗に対し、積極的にフォローすることができる。	4.93	0	0	4	11	12	16
<自主的・実践的態度>		平均=26.54 (/ 36)					
1. 文や言葉で計画した事を具体化させるイメージを持つ事ができる。	4.67	0	0	4	15	15	9
2. 自分達の計画に対して、様々なハプニングを想定することができる。	4.07	0	3	8	20	7	5
3. 自分で役割を考え、自分から行動に移すことができる。	4.77	0	1	5	9	16	12
4. 共同活動で何が足りないか見つけその役割を果たす事ができる。	4.21	0	3	7	17	10	6
5. 自分が考えたことを文書にまとめ、仲間に説明することができる。	4.14	0	5	7	15	9	7
6. 自分たちの行動に対して良かった事や改善点などの評価ができる。	4.67	0	1	4	9	23	6
<人間関係を育む資質・意識>		平均=31.40 (/ 36)					
1. 困っている仲間がいたら、すぐに助けてあげたいと思う。	5.13	0	0	3	9	10	21
2. 仲間のことを詳しく知る事は共同活動にとって大切だと思う。	5.51	0	0	1	5	8	29
3. なるべく仲間の良いところを見るようにしてあげたいと思う。	5.47	0	0	0	5	13	25
4. 感謝・反省の言葉を素直に言えるほうだ。	5.23	0	1	2	4	15	21
5. 友人は自分から得るものだと思っている。	4.95	0	1	1	11	16	14
6. 人とかわかることが基本的に好きである。	5.09	0	0	0	7	13	20
<生き方・在り方>		平均=26.84 (/ 36)					
1. 自分の人生を見通しを立てて考えることができる。	4.60	0	2	5	10	17	9
2. 自分が少しずつでも、日々成長していることを感じる事ができる。	4.49	0	0	8	12	17	6
3. 将来のために、今できることを考えたり、取り組むことができる。	4.56	0	1	8	11	12	11
4. 今、自分が置かれている状況を冷静に考えることができる。	4.39	0	2	5	17	12	7
5. 自分が周囲のために何ができるかを考えられる。	4.56	0	1	5	12	19	6
6. 自分が周囲に与えている影響を理解することができる。	4.23	0	3	8	13	14	5

なお、この授業を通して特に身についた項目について回答させた結果、「2. 仲間のことを詳しく知る事は共同活動にとって大切だと思う。」(回答率=51.2%)、「5. 自分が周囲のために何ができるかを考えられる。」(回答率=44.2%)、「3. 自分で役割を考え、自分から行動に移すことができる。」(回答率=44.2%)、「9. グループの協力関係に参加することができる。」(回答率=41.9%)が上位項目となった。

成 (Task) 機能と、人間関係 (Relation) の2つの機能で説明しているものがほとんどであり、時代は経過しているものの現代でも十分適用可能な考え方であると思われる。この理論に基づけば、受講生の自己評価の中でM型 (集団維持能力) の考え方が支持され、これを達成できたと考える学生が多いことが伺える。実際の講義では、グループ学習による「職員会議」「修学旅行の計画書作成」など協同性を強く意識しなければならない課題が確かに多いが、一方で、例えば、「体育祭の運用」というように他の受講生に対しP型 (目標達成能力) による説明と牽引の役割も課題には含んでいる。しかし、これらを自己評価において高く捉えたことは、学生達が授業を通して、特別活動を運用するには、これらを必要能力と考えたとみることでもできる。今回の新学習指導要領でも「良好な人間関係を築く力の育成」が掲げられていることから、児童・生徒が特別活動を通して具体的に仲間作りや共同的活動に取り組むためには、範として自身の社会的スキルや人間関係力が重要だと考えたものと推測することもできる。これについては、以下の通り、自由記述回答にも数多く示されていた。

で役割を分担し、自分のことが終わったら他に何ができるか探すことでスムーズに行うことができた。グループのみんなで力を合わせたからうまくいったと思う。1人ではここまでできなかった。私は、教師というのは単独で判断・行動するものだと思っていたけど、今回授業を受けてその考えが変わった。他の先生との協力はもちろん、生徒や保護者との協力関係もたいせつなことがわかった。

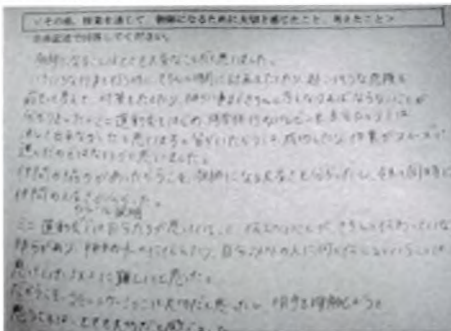


この記述のように教科教育法における模擬授業などを通じて、教師とは、教壇に立って個人でクラスを支配していくものだというイメージを持つ学生も少なくない。今回のシミュレーション学習を通じて、いかに教師もまた協同性が重要であることを認識できたという成果は意義の大きいものであると自負している。

次に、カテゴリー別の評価において、評定平均値が上記に比べて低くなったのが、〈望ましい集団行動1-集団の統率力〉、〈自主的・実践的態度〉、〈生き方・在り方〉の3つである。項目ごとに見ると、とりわけ直接的にP機能について記されているもの (例：仲間をひっぱっていくことができる。) については、低く評価している学生が多いことが表1から伺える。実際の授業の中で行った「体育祭の運用体験」では、グループごとに競技種目を企画し、他のグループにその場で説明をして参加してもらう形で運用している。そのため、自分たち頭の中では理解できていても、他者に理解をさせることの難しさ、特に、想定外の事態への対応や、言葉によって異なる解釈がなされる可能性を想定することが難しいという学生は自由記述の回答から多く見られた。説明の失敗や予期せぬトラブルなどは本番で説明をしてみても初めて気づくというケースがほとんどであり、事後の反省会で必ず指摘される内容となっている。この機会を通じて、P機能に関して低く評価をする学生が多数いるものと考えているが、学生の段階で気づけたことは、今後の教職に関する学習にも有効であると考えている。

<記述例1>

教師になることはとても大変なことだと思います。いろいろな行事を行うときに、きちんと事前に計画を立てたり、起こりそうな事件などを考えて、前もって計画をたてたり、細かいことまできちんと考えなければならぬことがわかりました。ミニ運動会をはじめ、修学旅行のプレゼンも自分一人では決してできなかったと思います。皆がいたからこそ、教師になる大変さもわかったし、仲間の大変さが分かった。



<記述例2>

みんなで協力することが1番大切だと思った。今回、運動会、修学旅行の計画を立てるにあたって、みんな



<写真1> 模擬職員会議の様子



<写真2> 体育祭運用実習の様子

最後に、この授業を通じて「特に身についた」と思った項目については、いずれの内容についても、やはり「共同活動の重要性」「協力関係への参加」など、共同活動の「場」に積極的に参加し、協動的に取り組むことや協力的な目的で主体性を発揮することなどが含まれている。このように、教員の多様な協力関係によって、特別活動が成り立ち、スムーズな運用が可能になることを授業を通して理解してくれることを期待し、また、教科教育以外の教師の職務についても理解を深めて、教職志望の意識を高めてほしいと願っている。

4. まとめと今後の課題

教職教養科目「特別活動の指導法」の授業では「講義+演習併用型」の授業を通して、知識だけに偏らない学生の実践的指導力の育成を目指し、また、校務シミュレーション学習を通して教職の理解を深め、モチベーションを維持させることを目的として、これまで取り組んできた。これら内容に対して、学生に習得内容の自己評価を求め、検討したところ、いずれの内容についても比較的高く評価されているものの、リーダーシップ行動論に基づく解釈をすると、P機能(目的

達成機能)よりもM機能(集団維持機能)に関する理解が特に高く評価されていることが明らかになった。これら両機能はいずれも高くなることが望ましい(三隅, 1966)ということから、今後、主導性を意識できるP機能に関する演習内容を取り込むことにより、さらなる向上を目指していきたいと考えている。

なお、今回の調査の課題としては、自由記述の内容に対する分析と考察について十分に組み込まなかったことが挙げられる。これは、分析環境が十分でないための手法の限界でもあるが、質問項目にとらわれない受講生の意識を、今後、テキストマイニングの手法により、どのようなキーワードが特別活動の指導法に対して必要な学習内容と意識されているかを明らかにするなど、さらに考察を深めていきたいと考えている。

5. 引用文献・参考文献

- 桑原憲一(1999) 学校行事を学級に生かす指導の方法「特別活動研究」, 392, 5-7.
- 三隅二不二(1966)「新しいリーダーシップ 集団指導の行動科学」 東京:ダイヤモンド社
- 文部科学省(2008) 中学校学習指導要領解説「特別活動編」 東京:ぎょうせい.
- 文部科学省(2010) 生徒指導提要. 東京:教育図書.
- 森嶋昭伸(2000) 中学校特別活動の新研究課題は何か「ガイダンス機能の充実を目指して」 「特別活動研究」, 404, 110-112.
- 宇留田敬一(1997) 特別活動の基礎理論と実践 東京:明治図書.

ピアスーパバイザーからのコメント

自己評価の5つのカテゴリーの6段階評価と記述式は学生が指導者になるための具体的な指標になるので、本研究の校務演習を導入した「特別活動の指導法」は実践的指導力の育成につながる講義であると思われる。そして、本研究から良い指導とは「 $1+1=2$ 」ではなく「 $1+1=2+\alpha$ 」で、この「 α 」を導き出すためには知識だけでなく、知恵が重要であることに改めて気付かされた。今後の本研究による学生の成果に期待したい。

(担当: 家政学科 藤島みち)